

お茶の時間

恥の文化の危機

編集委員長

最近カヌー競技で、日本代表だったS選手が、ライバルをドーピング違反に陥れるために相手の飲料ボトルに禁止薬物を混入するという事件が発覚した。

日本カヌー連盟の発表によると、妨害行為をした選手は、昨年8月、海外遠征中にインターネットで筋肉増強効果のあるステロイドの錠剤を購入し、9月に石川県で開催されたカヌー・スプリントの日本選手権で、砕いた錠剤をレース前に日本代表選手の飲料ボトルに混入した。これを飲んだ選手は、

レース後のドーピング検査で陽性反応が出て、暫定的な資格停止処分になった。この選手は、一貫して薬物摂取を否定したため、カヌー連盟が有力選手に状況を説明したところ、S選手が連盟幹部に薬物の混入を告白した。

日本アンチ・ドーピング機構は、加害者を資格停止8年の処分にし、先の被害にあった選手の処分を解除した。

この背景には、東京オリンピックの代表を目指す中で、若手が台頭してくる中で勝てない焦りがあった。

このような妨害行為は、「スパイク」と呼ばれるもので、1988年ソウルオリンピックの陸上男子1000mで、金メダルをばく奪されたベン・ジョンソン選手以来、ドーピングで陽性になった選手が常用する言い訳である。

これまでに、海外では実際に他人から混入された事件が起きているが、日本ではそれほど深刻に受け止められてこなかった。その理由は、日本人の心に根付いている「恥の文化」である。

今回混入事件を起こしたことは、大いに責められなければならないが、発覚後、事の重大さに気づき、知らぬふりすることなく、告白したことは、どこかに「恥の文化」が残っていたからだと思います。

最近オリンピック級の選手たちの練習拠点は海外が多い。言葉の壁も少なくない。状況次第では、事件を起こす障壁は、自分の心の強さ以外何もない。改めて、日本人選手の心の中に「恥の文化」を刻み直してほしいと思う。

今年から小学校で道德教育が正式に始まる。子供の時から、日本人の心に伝えられてきた大事な「恥の文化」もしっかり教えて欲しい。

ただ、東京オリンピックでは、世界中の国から、いろいろな常識を持った選手が集まってくる。彼らが悪い行為をするとは限らないが、彼らが被害に

遭わないようなシステムを考え、準備する必要があるかもしれない。

オリンピックの価値が高まる中、選手たちはドーピング不正の重さや恐ろしさを理解しないまま、重圧の中誘惑の波にさらされる若者が増えている。

日本アンチ・ドーピング機構は、ドーピング検査の他、禁止物質を含む可能性のある薬やサプリメントの摂取に関する注意喚起などの啓蒙活動をしているが、今回のような飲食物の管理については担当の範囲を超えていると話している。

日本カヌー連盟によると、通常の競技会では、コースわきの建物に併設された水飲み場に参加選手の飲料ボトルが置かれており、誰でも触ることができる状態だという。今後は、大会中に選手の飲料ボトルを預かって一括管理する「ドリンク保管所」の設置を発表した。また、保管所内の監視カメラの設置も検討課題に上がっている。

各種競技団体でも、「口にするものは全て自己責任」が一般的であり、他人による薬物混入への対策をしているケースはほとんど見られない。

いずれにしても、日本スポーツ界の「甘さ」が致命的にならないように、対策を見直す必要があるだろう。